

# 汎太平洋婦人協会の設立と戦間期の活動

—女性たちのキリスト教越境ネットワーク—

安 武 留 美

## はじめに

1928年の夏、第1回汎太平洋婦人会議がハワイのホノルルで開催され、太平洋岸の13の「国」を代表する150名余りの女性たちが友好・親善促進のために出席した。1930年に同じくホノルルで開催された第2回汎太平洋婦人会議では、メンバー国間の調整や将来の会議開催の準備を行うための永久組織—汎太平洋婦人協会（Pan-Pacific Women's Association）—が設立された。そして、1934年にハワイのホノルルで第3回、1937年にカナダのバンクーバーで第4回の汎太平洋婦人会議を開催した。1939年、第二次世界大戦の勃発とともに活動を停止した汎太平洋婦人協会は、戦後復活し、今日は汎太平洋東南アジア婦人協会（Pan-Pacific and South East Asia Women's Association）として活動を続けている。<sup>1</sup>

欧米のフェミニストたちは、第一次世界大戦が勃発すると世界平和実現のために、また戦後には再構築されつつある世界秩序の中に新たな活躍の場を求めて、それぞれの関わる運動の国際化を図った。汎太平洋婦人協会の設立は、そのようなグローバルなレベルでの戦間期の女性運動の活発化を反映するものであった。しかし、研究の進んでいる国際女性組織—例えば、国際女性評議会（International Council of Women）、国際婦人参政権同盟（International Woman Suffrage Alliance, 後に International Alliance of Women と改名）、婦人国際平和自由連盟（Women's International League for Peace and Freedom）等—が、環大西洋諸国の欧米女性間の協力関係をベースに発展してきたことを考えると、アジア人やポリネシア人等多様な人種を含む環太平洋地域

1 汎太平洋東南アジア婦人協会『汎太平洋東南アジア婦人協会六十年史』（ドメス出版、1993）、11-29.

を活動基盤とする汎太平洋婦人協会は特筆に価する。<sup>2</sup>

従来の研究によると、19世紀から20世紀にかけて、アメリカ中流白人の婦人組織による労働者階級及び有色人女性たちへの働きかけには、「フェミニスト・オリエンタリズム」と呼ばれる、自分たちの経験に基づいて想定した普遍的な「女性」のための方策を最も望ましいものとする姿勢が顕著であった。つまり、中流白人女性活動家は、他の文化および社会で生活する女性たちを一枚岩的に想像し、自分たちの観点から「女性」のための社会改革を強引に推進してきたとされるのである。その意味で、太平洋諸国の婦人たちの間に「相互理解と友情」を深め、「協力して社会問題及び婦人問題の研究と改善」に努めるという緩やかな目標を掲げた汎太平洋婦人会議は、多様な女性たちの存在を認識し始めた欧米白人女性が、環太平洋地域における一様ではない婦人問題を捉え直そうとする新しい試みであった。

汎太平洋婦人協会に関する先行研究は、そのような特徴を肯定的、また否定的に評価してきた。ポール・フーパー（Paul Hooper）は、20世紀はじめにハワイでも高揚した国際主義が汎太平洋婦人協会の設立に寄与したことを指摘し、この協会は「文化的越境を前提として組織された最初的女性団体である」と主張した。<sup>3</sup> また、杉森長子は、1931年にノーベル平和賞を受賞したアメリカを代表する女性運動家ジェイン・アダムズ（Jane Addams）が第1回汎太平洋婦人会議の国際議長を務めたことに注目したが、多様な人種の共存するハワイ社会に誕生し、参加者がそれぞれの社会の抱える問題を報告、議論し、問題解決に向けて共同作業をするという会議運営をおこなった汎太平洋婦人協会は、国家や民族の枠組みを超えてパシフィズムとフェミニズムが融合した例であるとして評価した。<sup>4</sup>

さらには、2つの研究が、汎太平洋婦人協会を、第一次世界大戦後のイギリス帝国再編成の中で活動したオーストラリア人参加者の視点から検討した。そのひとつであるアンジェラ・ウーラコット（Angela Woollacott）の研究は、汎太平洋婦人協会が白人フェミニストの目標を一方的に押し付けるのではなく、太平洋諸国の女性間の交流と協力を緩やかに促進し、アジア人・ポリネシア人女性たち

2 例えば、Leila J. Rupp, *Worlds of Women: The Making of an International Women's Movement* (Princeton: Princeton University Press, 1997); Margaret H. McFadden, *Golden Cables of Sympathy: The Transatlantic Sources of Nineteenth-Century Feminism* (Lexington: Kentucky University Press, 1999) を参照。

3 Paul F. Hooper, "Feminism in the Pacific: The Pan-Pacific and Southeast Asia Women's Association," *The Pacific Historian* 20 (1976): 367-377.

4 杉森長子『アメリカの女性平和運動史、1889-1931』（ドメス出版、1996）、196-230.

とより平等な立場に立とうとしていたとし、協会の革新性を強調した。<sup>5</sup> また、もうひとつのフィオナ・ピアズリー (Fiona Paisley) による研究は、汎太平洋婦人協会の白人指導者たちが自分たちの文化を最も望ましいものとしてアジア人・ポリネシア人参加者を評価していたことを挙げ、汎太平洋婦人会議における文化交流がフェミニスト・オリエンタリズムから脱し切っていなかった一面を指摘している。<sup>6</sup> また、アメリカ本土代表団の中核をなしたカリフォルニアの女性国際主義者たちの姿勢に注目したアレクサンドラ・エプスタイン (Alexandra Epstein) は、汎太平洋婦人会議を主導した女性たちが、男女の平等の実現よりも、女性のための社会改良、社会改革を目指したソーシャルフェミニストたちであったことを明らかにしている。<sup>7</sup> 本論文は、これらの先行研究に基づきながら「越境性」という視点を取り入れ、汎太平洋婦人協会が「キリスト教越境ネットワーク」とどのように関わるのか、また、地域性を旗印に女性間の連帯を築こうとした汎太平洋婦人協会の活動を支えた女性たちの「越境性」を検討するものである。

## 1 アメリカ、ハワイ、そして環太平洋地域の キリスト教越境ネットワークと汎太平洋婦人協会の設立

汎太平洋婦人会議の誕生地となったハワイ社会は、19世紀始めから形成され始めたキリスト教越境ネットワークの延長線上に形成され、ボストンを根拠地とするアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions, ABCFM) から派遣された宣教師たちの異教徒救済及び文明化のための福音活動の影響が色濃く残る土地柄である。1820年に、当時サンドイッチ諸島と呼ばれていたハワイ群島にまたがるハワイ王国に到着したアメリカ人宣教師たちは、国王を改宗させ王国のキリスト教化を図り、ハワイ語をアルファベット化して識字率の飛躍的向上に寄与し、西洋式教育制度をもたらして王国の近代化を促進した。と同時に、宣教師によるハワイのキリスト教化、そして君主の信

5 Angela Woollacott, "Inventing Commonwealth and Pan-Pacific Feminism: Australian Women's Internationalist Activism in the 1920s-30s," in Mrinalini Sinha, Donna Guy, and Angela Woollacott eds, *Feminism and Internationalism* (Oxford: Blackwell Publishers, 1999), 81-104.

6 Fiona Paisley, "Cultivating Modernity: Culture and Internationalism in Australian Feminism's Pacific Age," *Journal of Women's History* 14, no. 3 (2002): 105-132.

7 Alexandra Epstein, "Linking a State to the World: Female Internationalists, California, and the Pacific, 1919-1939" (Ph.D. diss., University of California, Santa Barbara, 2003).

頼を得た一部の宣教師またその子孫が関与して、ハワイの西洋化、資本主義化が進められ、その延長上で、アジア系労働者の大量移入や、ハワイ人の意思に反して強行されたハワイ王国の崩壊（1893年）と合衆国への併合（1898年）が起こったといえる。宗教的使命感に動機付けられたアメリカ人宣教師たちのハワイでの活動は、歴史的にみると国家の政治・経済的利害から切り離すことはできず、その意味で、アメリカの帝国主義の一翼を担っていたといえる。そして、戦間期までには、多様化した宣教師の子孫たちは、相互に姻戚関係を結び、キリスト教伝道者というよりは、ハワイ準州の政財界の要人、教育活動やYMCA等市民組織の指導者として、ハワイ社会で絶大な力を行使するようになっていた。<sup>8</sup>

20世紀の初め、ハワイの経済的繁栄を背景に、宣教師の子孫を中心とするホノルルの白人エリートの間では国際主義が高揚し、著名な2つの男性主導の国際組織—汎太平洋同盟（Pan-Pacific Union）と太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations）—が設立された。汎太平洋同盟は、もともとはハワイの通商・観光促進を目的に、サウスカロライナ出身のジャーナリストで出版も手がけたアレクサンダー・H・フォード（Alexander H. Ford）によって1917年に設立された。ヨーロッパ諸国間の紛争に起因する第一次世界大戦の勃発、さらには合衆国大統領ウッドロー・ウィルソン（Woodrow Wilson）の提唱した戦後の国際平和構想がヨーロッパ列強の手で骨抜きにされると、汎太平洋同盟は、国際平和の実現には紛争好きの環大西洋諸国ではなく環太平洋諸国へ目を向ける必要を唱えた。この主張は、ハワイの白人エリートや米国本土の政・財界人の支持を得るところとなり、汎太平洋同盟は環太平洋諸国の政・財界の要人へネットワークを

---

8 例えば、吉田亮『ハワイ日系2世とキリスト教移民教育—戦間期ハワイアン・ボードのアメリカ化教育活動』（学術出版会、2008）；中島弓子『ハワイ・さまよえる楽園—民族と国家の衝突』（東京書籍、1993）；Noenoe K. Silva, *Aloha Betrayed: Native Hawaiian Resistance to American Colonialism* (Durham: Duke University Press, 2004); Patricia Grimshaw, *Path of Duty: American Missionary Wives in Nineteenth-Century Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1980); Gwenfread E. Allen, *Bridge Builders: The Story of Theodore Richards and Mary Atherton Richards* (Honolulu: Hawaii Conference Federation, 1970); Lawrence H. Fuchs, *Hawaii Pono, "Hawaii the Excellent": An Ethnic and Political History* (Honolulu: Bess Press, 1961) を参照。

拡大した。<sup>9</sup> 日本には、1920年に貴族院議長徳川家達を会長とする日本汎太平洋協会が設立され、その傘下に汎太平洋クラブ等の関連組織が東京や大阪に作られた。<sup>10</sup> また、アメリカ西海岸で排日圧力が高まると、自らの指導下に、かつての主権者であったハワイ人と最大人口を数えるようになったアジア系住人の人種的融合を図ってきたと自負する白人エリート層は、ハワイ社会の安定化と太平洋諸国間で顕著化する人種問題解決のためにハワイを人種交流の「実験場」とすべく、太平洋諸国の代表を集めたキリスト教青年会（Young Men's Christian Association, YMCA）の国際会議をホノルルで開催した。それをきっかけに、1925年、太平洋諸国間の相互理解促進のための調査・研究を行う太平洋問題調査会が設立された。<sup>11</sup> 当時、ホノルルに本部を置いたこの2つの組織の活動には、太平洋諸国から政治、経済、教育などの分野で活躍する要人が参加したが、日本人グループの中心には渋沢栄一、新渡戸稲造、成瀬仁蔵などの日米間のキリスト教越境ネットワークと接点を持つ人々がいた。<sup>12</sup> この2つの国際組織によって様々な国際会議の開催されたホノルルには、多岐にわたる問題を討議するために環太平洋諸国から男女双方の代表者が集った。

汎太平洋婦人協会は、汎太平洋同盟の娘または妹組織と称されることもあるが、第1回汎太平洋婦人会議開催のきっかけは、1924年8月汎太平洋同盟主催の汎太平洋食糧保存会議においてニュージーランド代表の上院議員マーク・コーエン（Mark Cohen）が、女性だけの会議の開催を提案したことであった。<sup>13</sup> 同盟の代表アレキサンダー・H・フォードの支持を得て、汎太平洋同盟の婦人部と関わりの深い女性たちがその準備を開始し、この集まりは後に「会議委員会」と呼ばれるようになった。同年12月に開かれたその会合には、同盟婦人部で活動してき

- 
- 9 例えば、Tomoko Akami, *Internationalizing the Pacific: The United States, Japan and the Institute of Pacific Relations in War and Peace, 1919-45* (New York: Routledge, 2002); Paul Hooper, *Elusive Destiny: The Internationalist Movement in Modern Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1980); 廣部泉「環太平洋共同体の萌芽—両大戦間期の民間団体」瀧田佳子編『太平洋世界の文化とアメリカ—多文化主義・土着・ジェンダー』（溪流社、2005）、57-76; 片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究—戦間期日本IPRの活動を中心として』（慶応義塾大学出版会、2003）; 山岡道男『「太平洋問題調査会」研究』（龍溪書舎、1997）を参照。
- 10 Prince I. Tokugawa, "Pan-Pacific Cooperation," *Mid Pacific Magazine* 33, no. 2 (February 1927): 455-458; "The Pan-Pacific Clubs in Tokyo," *Mid Pacific Magazine* 33, no. 2 (February 1927): 459-460.
- 11 吉田亮「ハワイアン・ボードによる1920年代の異人種間教育—クロスロード教会の成立」『教育文化』6（1997）、1-54.
- 12 吉田亮「ハワイと同志社—キリスト教越境ネットワークの形成と展開」『同志社・ハワイ・日本—知られざる日米交流史』（同志社大学国際センター、2008）、55-80.
- 13 日本汎太平洋東南アジア婦人協会『汎太平洋東南アジア婦人協会六十年史』、11.



たジュリー・ジャッド・スワンジー (Julie Judd Swanzy) の他、ホノルル YWCA 委員長 A. L. アンドリュー (A. L. Andrew)、上海 YWCA での活動から戻ったばかりの医師ヴィヴィア・アプルトン (Vivia Appleton)、またスワンジーの娘でホノルル女性有権者協会会長のロザモンド・モーガン (Rosamond Morgan)、さらには、ホノルル YWCA の移民女性のための事業であるインターナショナル・インスティテュートの日本人幹事岸本ツル他、アジア人女性も出席していた。<sup>14</sup>

アンジェラ・ウーラコットが指摘したオーストラリア参加者の姿勢と同様に、会議委員会を主導したハワイの白人女性たちにも、前世紀の白人女性活動家に比べるとアジア人やポリネシア人女性とより平等な立場に立とうとする姿勢が顕著であった。1928 年、会議委員会は第 1 回汎太平洋婦人会議へのハワイ代表団を組織するための原則を明らかにし、代表団の 50% をヨーロッパ系またはアメリカ系、つまり白人とし、他の 50% を他人種であるエスニックグループ—日本人、中国人、フィリピン人、ハワイ人—とした。<sup>15</sup> その結果、第 1 回汎太平洋婦人会議の 51 名のハワイ代表団の中には、前述の岸本ツル、パイナップル協会実験場で働く森田ヘレン、また汎太平洋同盟の役職に就くホノルル日本人社会の要人たちの妻—原田さき (ハワイ大学教授原田助の妻)、毛利やえ (医師毛利伊賀の妻)、相賀せい (日系新聞『日布時事』経営者相賀安太郎の妻)—の名前が含まれていた。<sup>16</sup> 汎太平洋同盟の活動に参加した日本人男性同様に、これら汎太平洋婦人協会とつながりを持つことになったハワイの日本人女性たちも、日米間のキリスト教越境ネットワークと接点を持つ人々であった。その中でも岸本ツルは、神戸女学院 (Kobe College) 卒業後に結婚したが未亡人となり、ハワイへ渡ってホノルル YWCA の移民女性のための事業であるインターナショナル・インスティテュートの幹事として白人エリート婦人たちと深く関わっていた。<sup>17</sup>

当時、宣教師の子孫たちの影響力が強いホノルル社会で、女性が独自の国際的

14 “The Pan-Pacific Women’s Conference, 1928,” *Mid-Pacific Magazine and the Bulletin of the Pan-Pacific Union* 28, no. 6 (December 1924): 15.

15 “Conference Delegation,” *Bulletin of the Pan-Pacific Union*, new series no. 102 (July 1928): 10–11.

16 *Women of the Pacific 1928; Proceedings of the First Pan-Pacific Women’s Conference, Honolulu, August 9–19, 1928, by Pan-Pacific Union* (Honolulu: Pan-Pacific Union, 1928): 278–279.

17 Bruce Bottorff, “Continuity and Change: A History of YWCA of Honolulu, 1900–1945” (Ph.D. Diss., University of Hawai’i, 1999), 149–150. なお、第 1 回から第 4 回までの汎太平洋婦人会議参加者の情報に関しては、太田雅夫氏から未出版の情報をご提供いただいた。

な活動を始めるのは容易なことではなかったようである。歴史的に、独立革命後に政治の分野から締め出された教会は女性と協力し合ってきたが、男女の役割と立場は明確に区別されていた。一般教会員であった女性に対して、聖職を独占する男性への従属が求められる社会だったのである。実際、19世紀を通して政教分離や産業化の進展により、教会員の主体は女性へと変化し、宗教は男性の領域から女性の領域へと移行した。しかし、教会における女性の役割は男性の聖職者や長老の下で教会の活動を支えることであり、たとえ独立した女性組織が設立されても、その目的は男性の活動を支えるためでなければならなかった。従って、アメリカの教会婦人たちは異教徒の救済という宗教的使命を果たすために、階級、エスニシティ、人種、国家を越境してきたが、ジェンダーの越境は果たしえなかった。教会婦人たちの活動は、男性の領域を侵すことのないように、女性と子供のための世俗的な領域に限定されてきた。そのような白人教会婦人の影響下にあるホノルルのアジア人社会の女性たちは、同様に、もしくはそれ以上に、女性の領域を超えることをためらったようである。

その意味で、いつも「(人の) 何マイルも先にいる」といわれていた進歩的な変わり者で、ホノルル古参の白人エリートグループにはよそ者でもあった汎太平洋同盟の設立者アレキサンダー・フォードの支援は、汎太平洋婦人協会設立に重要であった。<sup>18</sup> 1925年1月に開催された汎太平洋女性会議開催準備のための会合には、アジア人女性の名前はもはやなく、ハワイ大学教授の李 S. C. と原田助がアジア人を代表して白人女性との討議に参加している。汎太平洋同盟及び太平洋問題調査会の主催する国際会議が男女双方の出席できるものであったことから、その席で、李は女性だけの会議を開かねばならない必要性を疑問視する発言をしている。また、原田も、近く開催の予定されている YMCA の会議が人種、経済、倫理を議題とするので、婦人会議はそれらの問題を避けて、婦人の関心事—例えば、健康、児童福祉、優生学と産児制限—に議題を限定するよう要請している。<sup>19</sup>

このようなアジア人社会のジェンダー構造を憂慮してか、1926年9月、アジア人女性の汎太平洋婦人会議への関心と協力を得るために、汎太平洋クラブの婦人部（婦人クラブ）が設立された。その目的について、フォードは、アジア人女性

18 Valerie Noble, *Hawaiian Prophet: Alexander Hume Ford* (Smithtown, NY: Exposition Press, 1980), 249.

19 *Jane Addams Papers*, ed. Mary Lynn McCree Bryan (Ann Arbor: University Microfilms International, 1984), 42: 908-910. 1928年8月に開催された第1回汎太平洋婦人会議では、教育、政府、健康、産業、社会事業の5つの問題についての討議が行われ、当時、ハワイにおいて一大関心事であった人種問題は議題として取り上げられなかった。

は男性の出席する会合には出席しないことに触れ、女性だけの会合を開くために婦人クラブを組織して、第1回汎太平洋婦人会議準備のためにハワイに住む全ての人種の女性たちが参加することを促すためとしている。<sup>20</sup>

このようなフォードの支援を最大限に生かすことができたのは、第1回汎太平洋婦人会議の会議委員会の名誉会長を務めたジュリー・ジャッド・スワンジーであったようである。彼女は、アメリカン・ボードからサンドイッチ・ミッションへ派遣された宣教医でカメハメハ3世の側近を務めたゲリット・P・ジャッド (Gerrit P. Judd) の娘で、イギリス人実業家フランシス・スワンジーの妻であった。スワンジー夫人は、ハワイの王族ともネットワークを持ち、ホノルル社交界の中心で広く世界の要人と交流するホノルルの白人エリートの一員であった。また、労働者家庭の育児支援のために無料幼稚園を建設・経営する白人女性の慈善団体や、ハワイ人エリート女性も参加するハワイ文化保存のための組織など、宣教師の娘たちが中核をなす多様な婦人組織で活躍していた。スワンジーは、汎太平洋同盟婦人部が設立されると会長を務めるようになったが、それ以前からフォードとは親交が深く、フォードの設立した海洋スポーツ促進のためのクラブに婦人部を組織したりしていた。<sup>21</sup> スワンジーは、第2回会議の会議執行委員会議長、そして1930年に汎太平洋婦人協会が設立されると名誉会長の座にも就いた。

こうして、軌道に乗り始めたハワイを中心とする国際的な女性運動勃興の試みは、第1回汎太平洋女性会議の国際議長を務め、当時のアメリカ人女性運動家を代表する婦人国際平和自由連盟会長のジェイン・アダムズなど、多くの女性たちの支持を得た。しかし、このような女性運動の出現を問題視する女性たちもいた。例えば、国際婦人参政権同盟の元会長で、やはり当時のアメリカを代表する女性運動家であったキャリー・チャップマン・キャット (Carrie Chapman Catt) である。アダムズとライバル関係にあったキャットは、当時独自に国際的な平和運動を仕掛けようとしており、アダムズの影響下に新たな国際活動が始まることは、阻止したかったようである。1927年太平洋問題調査会の主催した教育会議に参加するためホノルルを訪れたキャットは、既に同様の目的で同様の活動を推進する組織が存在するため、第1回汎太平洋婦人会議で新たな女性の国際組織が設立されることに反対の意を表明している。<sup>22</sup>

20 "Pan-Pacific Women's Club Organizes," *Bulletin of the Pan-Pacific Union*, new series no. 84 (February 1927): 9.

21 Barbara Bennett Peterson, *Notable Women of Hawaii* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1984), 361-364; Mary Colum, *Life and Dream* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1947), 317-319.

22 Mrs. Frances M. Swanzy, "Greetings," *Women of the Pacific* (1928): 8.



このようなアメリカ本土の女性からの異議申し立てに対して、準州ハワイの女性たちを後押ししたのは、イギリス帝国の影響を脱して独立した国際女性運動を始動させたいと願う英国自治領オーストラリア人女性たちであった。上海YWCAで活動するオーストラリア人労働改良家のエレノア・ヒンダー (Eleanor Hinder) は、会議開催に先立って『太平洋の女性：汎太平洋婦人会議への進言』 (*Women in the Pacific: A Contribution to the Pan Pacific Women's Conference*) と題する小冊子を出版している。その中で、ヒンダーは、著名な国際女性組織である、国際女性評議会、国際婦人参政権同盟、婦人国際平和自由連盟、YWCA がすべてヨーロッパに本部を置き、YWCA を例外として、アジア人女性とほとんど接触のないことを強調した。そして、太平洋諸国の女性間の交流のための永久的な組織を設立することにより、「建設的な太平洋的思考」を遠く離れたヨーロッパの組織にもたらし太平洋地域に対する世界の認識を高めることができると主張した。ヒンダーの議論によると、新しい組織の目的は、アジア女性に対してもアプローチを始めたヨーロッパに本部を置く既存の国際女性組織との競合ではなく補完であった。<sup>23</sup>

第1回汎太平洋婦人会議開会の席で、フォードは、太平洋諸国を代表する女性たちが太平洋を基盤とする新たな組織を「生み出すことを怖れる」必要のないことを主張した。<sup>24</sup> 一方、スワンジーは、永久的組織の設立が最も重要であることを強調しながらも、既存の国際組織との関連があらゆる角度から検討されるべきことを主張した。<sup>25</sup> その結果、第1回汎太平洋婦人会議では、永久的組織ではなく活動継続のための委員会が設立され、汎太平洋同盟及び参加者の支援を得て、第2回汎太平洋婦人会議の開催を決定した。さらには、ジェイン・アダムズから第2回会議は機運の低迷しないうちに開催するよう促され、2年後の1930年に開催されることが決定された。<sup>26</sup>

こうして汎太平洋婦人協会が設立されたのは、1930年の第2回汎太平洋婦人会議においてであった。協会の定款によるとその目的は、太平洋の女性たちの間に「相互理解と友好を促進し」、「平和への絆を強める」ことであった。そして、

23 Eleanor M. Hinder, *Women in the Pacific: A Contribution to the Pan Pacific Women's Conference, Honolulu, August 9-19, 1928* (Shanghai: 1928), 4-9. そのほとんどは、*Bulletin of the Pan-Pacific Union* 102 (July 1928): 11-14 に再版されている。

24 Alexander Hume Ford, "Greetings from the Pan-Pacific Union," *Women of the Pacific* (1928): 11-12.

25 Swanzy, "Greetings."

26 "The Final Business Session of the First Pan-Pacific Women's Conference," *Women of the Pacific* (1928): 274-275.

その主な仕事は、数年毎に開催される汎太平洋婦人会議準備や各国の社会状況の調査と改善のために、メンバー国間の調整を図ることであった。初代名誉会長にジュリー・ジャッド・スワンジー、会長にオーストラリア代表の大学教授でオーストラリア YWCA 幹事ジョージア・スィート (Georgia Sweet)、第一副会長には米国本土代表、第二副会長には中国代表が選ばれた。そしてその会則には、会の目的に賛同する太平洋沿岸に位置する「国 (countries)、自治領 (dominions)、植民地 (colonies)、領土 (territories)、属国 (dependents)」はすべて「国 (countries)」として、それぞれの汎太平洋委員会またはそのような機能を果たす組織を通して協会に代表を送る権利のあることが明記された。こうして、当時合衆国の準州 (territory) であったハワイも、イギリス連邦の自治領 (dominion) であったオーストラリアやカナダも、また日本の植民地であった朝鮮や米国の植民地であったフィリピンも「国」として代表を送る権利が与えられたのである。<sup>27</sup> これは、米国大統領ウッドロー・ウィルソンが提唱した「民族自決」の原則を、ヨーロッパのみならずアジアにも適用しようとする画期的な試みであった。

## 2 日本人参加者とキリスト教越境ネットワーク

日本人女性への第1回汎太平洋婦人会議参加の呼びかけは、1927年のフォードをはじめ関係者が来日した際に行われた。<sup>28</sup> 汎太平洋同盟の記録には、日本汎太平洋協会会長の徳川家達の主導で組織された9名の女性からなる日本代表団選出委員会が、25の女性団体へ代表派遣を打診して代表が選出されたと記されている。<sup>29</sup> 汎太平洋同盟及び太平洋問題調査会と関わりの深いクェーカー教徒の新渡戸稲造・メアリー夫妻の影響下にある女性たちが1921年に婦人平和協会を設立していたが、<sup>30</sup> 代表団の選出は、この協会に属する井上秀子、ガントレット恒子、また YWCA 関係者が中心となって行われたようである。その結果組織された日本代表団は、国際的な研究活動および女性運動に参加できるエリート集団で、日本女子大学教授井上秀子を団長とし、YWCA の藤田たき、婦人平和協会のガ

27 “Constitution of the Pan-Pacific Women’s Association,” *Women of the Pacific* (1930): 395.

28 “Joint Committee Work on Pan-Pacific Women’s Conference,” *Bulletin of the Pan-Pacific Union*, new series no. 88 (May 1927): 13–15.

29 “Conference Delegations,” *Bulletin of the Pan-Pacific Union*, new series no. 102 (July 1928): 8.

30 『日本女子大学総合研究所紀要』8 (2005).

ントレット恒子、婦人参政権獲得同盟の市川房枝、日本女医会の吉岡弥生、日本女子大学同窓会櫻風会の大多和たけ子、東京女子師範学校同窓会櫻蔭会の大江すみ子、大阪汎太平洋協会推薦の井出菊江、元ハワイ総領事夫人矢田千代子から構成されていた。<sup>31</sup> しかし、十分に公開されない形で選出されたこの代表団に対して、当時相当数の会員を有する全国小学校連合女教員会の幹事木内キョウ等が参加を求めた。<sup>32</sup> その結果、広くメディアが注目するところとなり、読売新聞社が読者選出代表として日本女子大学教授の正田淑子の派遣を決めた。さらには準代表として、朝日新聞社の女性記者北村兼子と、渋沢栄一など財界人からの寄付を集めた女教員会の木内キョウ、黒崎悦子、石川ふさ子、山口君子の4名、その他訪問者が加わり、総勢二十余名が、第1回汎太平洋婦人会議に参加するため日本を出発した。<sup>33</sup>

第1回汎太平洋婦人会議に参加した日本人参加者は、計4回の会議の中で最も多く、その年齢、階級、学歴、関心事は多様であった。しかし、基本的に明治以降の日本の近代化と西洋化を肯定する人々であり、そのことは、例えば、当時の著名な女性運動家の代表団に対するコメントに明らかである。与謝野晶子、石本静江、山田わか、久布白落実たちは、会議を支持して参加する代表団を激励した。しかし、社会主義者の山川菊江は、「婦人の資産家や上層職業婦人が遊びがてら出かける」ような会議に「殆ど無産階級同様の」小学校の女教員が出席することを痛烈に批判した。<sup>34</sup>

実際、汎太平洋婦人会議は、19世紀から形成されてきたキリスト教越境ネットワーク上にあるホノルルの中上流白人エリート婦人の主導するものであった。そのキリスト教越境ネットワークは、もともと唯一神信仰伝播のために地域の越境を果たしたアメリカ人婦人宣教師によって開拓されたものであるが、歴史的に異文化交流の最前線を構成してきた。そのため、このネットワーク上の女性たちは異文化交流経験に富み、その中には環太平洋地域の多文化性により敏感であろうとする人々もいた。彼女たちは、一枚岩的な「女性」を想定して「女性のため」と称する一定の目的を掲げるのではなく、より緩やかな人と人との交流を促進し

31 金子しげり「汎太平洋婦人大会その他」『婦選』（1927年2月1日）、4；市川房枝「汎太平洋婦人会議と婦選獲得同盟」『婦選』（1928年6月1日）、10；*Women of the Pacific* (1928): 229-230；日本汎太平洋東南アジア婦人協会『汎太平洋東南アジア婦人協会六十年史』、123。

32 木内キョウ「教育一路」『伝記叢書65』（大空社、1989年）、133-137。

33 市川房枝記念会『婦人参政権関係資料、1918-1946』58：1032-1087；日本汎太平洋東南アジア婦人協会『汎太平洋東南アジア婦人協会六十年史』、123。

34 市川房枝『市川房枝自伝、戦前編』（新宿書房、1974）、192-196；「諸代表への希望」『婦選』（1928年7月1日）、9。

て、環太平洋地域に住む女性たちの現実を知ることを重要視した。

しかし、皮肉なことに、そのような女性たちの新しい国際的な試みに、深く、しかも無理なく関わっていくためには、英語や西洋式マナーに通じ、他の参加者との交流をそつなくこなすことのできる能力が必要であった。英語やアメリカの習慣を熟知するハワイ在住の日本人女性や二世たちは、日本代表のもてなしや活動支援をするハワイ代表団の一員であったので、日本代表として注目を浴びたのは日本から参加した、井上秀子や井出菊江などのアメリカで教育を受けた高学歴の女性、及びガントレット恒子のような日本において英米婦人宣教師のもとで学んだ女性たちであった。このような側面を持つ会議は、西洋的な女性運動に関して実質的な成果を得ることを期待して参加した人々にとっては、期待はずれであった。例えば、婦人参政権獲得同盟を代表して会議に参加した市川房枝は、ソーシャルフェミニストである白人女性たちが主導し、親善と友好を優先する汎太平洋婦人会議は単なる「お祭り騒ぎ」に過ぎなかったと批判的である。<sup>35</sup>

1929年、基督教女子青年会日本同盟内に同盟代表の辻マツを委員長とする国際連絡婦人委員会が設立され、汎太平洋婦人会議への日本人代表選出はこの委員会によって行われることになった。この委員会の目的は、世界的に活発化しつつあった女性たちの国際協力の試みに参加するために日本国内の女性組織の連携を図ることであったが、汎太平洋婦人会議への代表団の選出も行った。<sup>36</sup> しかし、第2回以降の汎太平洋婦人会議は、多様な層の日本人女性の参加を見ることはできなかった。日本がまだ欧米志向で英米との国際協調を重視しながら領土と国力の拡大を計ろうとしていた1920年代が終わり、軍国主義、国家主義が台頭する1930年代になると、アングロサクソン系の女性が主導する汎太平洋婦人会議に対する日本人女性の関心は次第に薄れていった。正・準代表から成る日本代表団のメンバーは、1930年の第2回会議には8名、1934年の第3回、1937年の第4回会議にはそれぞれ6名へと減少した。<sup>37</sup>

特に1933年以降、日本の傀儡政権である満州国設立に対する国際的な非難の高まりから日本が国際連盟を脱退すると、汎太平洋婦人会議の中でも中国人参加者の日本への批判が顕著になった。その様な状況下で汎太平洋婦人会議の活動を支えたのは、既に環太平洋地域に形成されていたキリスト教越境ネットワークに接点を持つ女性たちの努力であったといえるだろう。エスカレートする日中間の

35 市川房枝「汎太平洋会議に対する日本の態度」『婦選』（1933年12月5日）、4-5。

36 「国際連絡婦人委員会」『婦選』（1929年4月10日）、9；市川房枝記念会『婦人参政権関係資料、1918-1946』4：1064、1066-1067；市川房枝記念会、同資料、51：383。

37 日本汎太平洋東南アジア婦人協会『汎太平洋東南アジア婦人協会六十年史』、123。

対立の中で、環太平洋地域の婦人たちが緩やかに交流を行うのは、ほとんど不可能であったが、英米女性指導者たちの一貫した姿勢と、その活動に意義を認めようとしたアジア人女性たちの努力により、汎太平洋婦人会議が継続された。

1934年の第3回会議に日本人女性で正式代表として参加したのは、英米婦人宣教師の開拓したキリスト教越境ネットワークを通して拡大した万国基督教婦人禁酒同盟（WCTU）の日本支部である日本基督教婦人矯風会や、クエーカー教徒の影響下で誕生した日本婦人平和協会の役員として活躍したガントレット恒子、津田英学校からプリンマー大学に留学して修士号を取りYWCA役員を務めるようになっていた加藤タカ、また、当時青山学院大学で教鞭をとっていた小泉郁子の3人であった。小泉は、幼年期に日本聖公会松江教会の活動を通してキリスト教に親しみ、東京女子師範学校卒業後、オーバーリン大学で神学を専攻し、ミシガン大学で教育学の分野で博士号を取得していた。<sup>38</sup> この会議で行われた選挙によって汎太平洋婦人協会の第2代会長に選出されることになるガントレット恒子は、選挙前にスワンジー夫人の自宅に招かれ次期会長に選出されたら引き受ける用意があるかどうかを尋ねられたという。そのような重荷は引き受けられないとするガントレットに対して、スワンジーは前会長が白人であったことに触れ「2回目には東洋の婦人がこれに当たってこそ汎太平洋婦人会議の意義と目的が明らかにされるので考えるように」と述べたという。<sup>39</sup>

実際、ガントレットが会長に選出されると、中国人代表は猛反対し、日本人の会長のもとに開催されることになる第4回会議には代表団を送らないと宣言した。<sup>40</sup> しかし汎太平洋婦人協会の定款により、協会を運営する評議会メンバーの定足数は5名で、そのうち3名は中国、日本、米国の代表であることが記されていた。そのため、第4回会議を開催するには、どうしても中国人代表の参加を確保する必要があった。<sup>41</sup> 第3回会議への日本人女性参加者は、日本人女性を会長として開催予定の第4回会議実現のために奔走した。正式代表のひとりであった小泉郁子は会議の翌年、オーバーリン大学留学中に知り合った清水安三の後妻となり、安三が北京のスラムで経営していた女学校での教育活動を通して中国人や朝鮮人女性との交流を開始した。<sup>42</sup> また、ガントレットは、矯風会やYWCAで活動する駒井静江が研究視察に出かける夫に同伴して中国を訪問するのに加わり、

38 *Women of the Pacific* (1934) : 69.

39 ガントレット恒『七十七年の思い出』（上村書店、1949年）、144-147.

40 Ibid.

41 “Constitution of the Pan-Pacific Women’s Association.”

42 樽松かほる『小泉郁子の研究』（学文社、2000年）；山崎朋子『朝陽門外の虹：崇貞女学校の人びと』（岩波書店、2003年）。



1936 年秋、上海から北京までを旅している。中国代表の出席をなんとしても実現したいガントレットは、中国の排日感情は「日本から男女がどんどん行って、つまらない優越感をなくしてお互いに話し合えば」良いと考え、各都市で中国人婦人との面会を精力的に行った。<sup>43</sup>

おそらく、白人指導者たちも同様の努力を行ったようで、第 4 回会議には梅夫人率いる 5 名の中国代表が参加した。<sup>44</sup> ガントレットによると、代表団を率いた上海 YWCA の梅夫人はハワイ生まれで米国育ちであり、上海から参加した他 2 名はガントレットが中国訪問時に面会した女性たちであった。<sup>45</sup> また、日本からは前述の駒井静子の他、日本 YWCA の松岡久子、またその娘でスワースモア大学留学中の松岡洋子、日本婦人平和協会の尾崎品江が出席した。また、カナダの特別代表として朝鮮人女性 1 名も出席を果たしている。<sup>46</sup> 会議当日の朝刊には日本軍の盧溝橋爆破による日中全面戦争の開始が一面に報じられていたが、ガントレットは、会議においては政治問題には触れない方針を白人指導者たちの協力を得て貫き、予定されていた討議を支障なく終え、帰国後、会議の「成功」を報告している。<sup>47</sup>

### おわりに

汎太平洋婦人会議は、アメリカ人宣教師の子孫を中心とするハワイの白人男性エリートの政治・社会的野心と結びついてはいたものの、それまでも男性とは競合しないように独自の越境ネットワークを築いてきた女性たちが、環太平洋地域の女性たちの間に緩やかな交流の場を作り出そうとした新たな試みであった。19 世紀初めから、キリスト教伝道のために世界各地へ赴任した男性宣教師に伴い、ポリネシアやアジア諸国へ到達した婦人宣教師たちは、教育事業や社会活動を通してアジア人、ポリネシア人女性との越境ネットワークを開拓した。そして、そのネットワークを伝って国際的な活動を展開したキリスト教女性組織—婦人キリスト教禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union, WCTU) 及びキリスト教女子青年団 (Women's Young Christian Association, YWCA)—や、クエー

43 ガントレット恒子他「支那を語る」『婦選』(1937 年 1 月 1 日)、8-13；ガントレット『七十七年の想い出』、147。

44 *Women of the Pacific* (1937): 14-15.

45 ガントレット恒子、「会議は成功せり」『女性展望』11 巻 9 号 (1937 年 9 月 1 日)、20-21.

46 *Women of the Pacific* (1937): 10, 15.

47 ガントレット「会議は成功せり」；『七十七年の想い出』、148-152.

カー教徒の平和運動から日本へも拡大した婦人国際平和自由連盟の世俗的な女性ネットワークが、キリスト教を標榜しない汎太平洋婦人協会の設立と戦間期の活動を支えていた。

この教会婦人たちの越境ネットワークは、もともと福音主義的エネルギーに駆り立てられたプロテスタント白人教会婦人による異教徒救済のための努力を源とするもので、神の、また文明の、福音を知らない「遅れた」女性たちを「引き上げ」ようとするフェミニスト・オリエンタリズムを内在していた。しかし、宗教的使命感から、いち早く地理的越境を果たして異文化の女性たちと交流した婦人宣教師及びその子孫は、20世紀はじめのアメリカ社会の中では最も異文化交流に経験を積んだグループの女性たちであった。婦人宣教師の活動を支える白人教会婦人によって組織された婦人伝道局がその事業のクライアントまた生徒としたアジア人女性たちは、世界に拡大しつつある WCTU や YWCA の活動を、アジア各地で担う強力な支持者となっていた。といっても、WCTU や YWCA の世界的な活動を指揮する本部組織の役職は、欧米の白人女性が独占していた。

これらの活動の延長上に出現した汎太平洋婦人協会は、中央組織の役職にもアジア人女性を登用し、活動内容も参加者の討議によって決定しようとするものであった。その意味で、この協会を主導した白人女性たちは、それまでのフェミニスト・オリエンタリズムを乗り越えて、多様な文化背景を持つアジア、ポリネシア諸国の女性たちとの緩やかなつながりを形成しようとする新しい試みを行ったといえる。

しかし、この試みが、当時はかなり自然に受け入れられていた人種及び文化に基づくヒエラルキーを超越することができたかどうかは、また別の問題であった。多人種と多文化の共存を目指して、朝鮮やフィリピンの女性たちにも代表を送る権利が認められ、ハワイ代表団を組織する際には白人女性たちが独占しないよう配慮がなされた。しかし、米国大統領ウィルソンの打ち出した「民族自決主義」をアジアにも適用したのは進歩的であったが、それは、アメリカ合衆国の準州であるハワイ、またイギリス帝国の自治領オーストラリアの女性たちの利害を反映するものであった。実際、アジア・ポリネシアからの参加者たちは、自国の近代化の度合いや、英語をはじめとする白人指導者たちの文化や行動規範をどれだけ身につけているかによって、協会内での役割が決まっていくのを感じざるをえなかった。白人女性指導者の進歩的かつ内包志向の努力にもかかわらず、汎太平洋婦人協会およびその会議は、白人女性指導者を中心として英語で運営される空間であり、そこには様々な不平等が存在し続けていた。

エスカレートする日本の軍事行動から日中間の対立が決定的になると、日本人女性と中国人女性が会議の場に同席して親善と友好を深めることは、ほとんど不

可能に近い難題となったが、白人女性指導者たちは自ら掲げた理想を強硬に推進した。そして、そのような白人女性指導者たちの努力を忠実に支持したのは、かつて白人教会婦人から指導や支援を受けてきたアジア人女性たちであった。戦間期、環太平洋諸国間に形成された教会婦人たちの越境キリスト教ネットワークによって維持された汎太平洋婦人協会とその会議において、参加者たちは地理的のみならず、文化的、政治的越境も果たしたかのように見えるが、皆が「汎太平洋婦人」というような共通のアイデンティティを持ち、まったく対等な立場で交流するまでには至らなかった。国家間の対立が顕著化した戦間期に、汎太平洋婦人協会および婦人会議を維持できたのは、白人教会婦人の文化的、政治的価値観を内面化した少数のアジア人女性たちの努力によるところが大きかったのではないだろうか。